

Raffiné Journal vol.18

カナナ8号線
— 音楽に飲み込まれる夜 —

夜の道路を、
街灯が静かに流れていく。

車の中には
言葉にならない空気がある。

声とメロディーが重なった瞬間、
その夜が、
音楽の中に立ち上がる。

松任谷由実さんの曲は、
歌詞を追って聴くという感覚にならない。

声とメロディーが重なった瞬間、
まず空気が立ち上がる。

夜の道路。
流れていく街灯。
車の中の静かな空気。
会話が続かない距離。

言葉を理解するより前に、
情景の方が先に現れる。

この曲を聴いていると、
自分が音楽の外にいる感覚がなくなる。

身体の奥が、
先に反応する。

音を追っているつもりなのに、
気づくと、
自分の方がその空気の中に入っている。

音楽はふつう、
音が届き、
言葉が届き、
そのあとで感情が残る。

けれど松任谷由実さんの曲は、
その順番にならない。

聴くというより、
最初からもう、その場にいる。

音が流れてくるのではなく、
情景の中へ引き込まれる。

声。
メロディー。
情景。
空気。
温度。

ふつうなら別々に届くものが、
この曲では同時に立ち上がる。

その瞬間、
音楽は音の集まりではなく、
ひとつの夜になる。

松任谷由実さんの曲を聴くと、
一冊の小説を読んだような密度が残る。


それは、
歌詞が物語を語っているからではない。

情景、空気、温度が、
音楽と同時に立ち上がっているからだ。

多くの音楽は、
音から感情へ向かう。

けれど松任谷由実さんの音楽は、
情景が先にひらかれ、
その中に声とメロディーが現れる。

音楽を聴いているのではない。
その夜に、入っている。



松任谷由実さんの曲は、
音楽ではなく、
情景が鳴っている。



R.

Raffiné Journal vol.18
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné